

令和三年度 四日市市立博物館 研究論文

歌川広重「東海道五十三次之内 四日市三重川」に

描かれた場所に関する考察

廣瀬 毅

# 歌川広重「東海道五十三次之内 四日市三重川」に描かれた場所に関する考察

廣瀬 毅

はじめに

歌川広重の代表作で、浮世絵の人気作品としても知られる「東海道五十三次」(天保四(一八三三)年頃刊行、以下「保永堂版」)は、風景画を浮世絵の新しい画題として定着させた画期的な作品群です。この作品が世に出た後、東海道物は揃物の定番



図1「東海道五十三次之内四日市三重川」(館蔵、日本トランスシティ寄贈)

として、何度も趣向を変えて作られました。

この保永堂版が大ヒットした理由としては、五十五枚という大部の連作であったことと、名所図会などの地誌や葛飾北斎の浮世絵「東海道五十三次」、あるいは十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』や『方言修行金草鞋』などの先行作を通じて、各地の風俗や習慣を知り、旅への憧れを持つ人々に向けた、疑似体験にも似た、見て楽しんで読み解ける魅力があったからではないでしょうか。

しかし、わずかですが描かれた場所がわからない作品があります。その一つに、風に飛ばされた菅笠を追いかける旅人を描く「四日市三重川」(図1、以下「三重川の図」)があります。

この絵に描かれた場所は、一般的には東海道が通る三滝橋とされていますが、筆者は四日市にある博物館の学芸員として、この絵の場所に関する質問を多くの人から幾度も受けました。それは、本当にそうなのかという疑問を感じる人が多いことの現れだと感じていました。

こうしたことから、描かれた場所と、この場所を描いた理由について考察を行うことにしました。

## 描かれた場所を探る

まずは、一般的に考えられている三滝橋説につい

て、なぜこれが定説となっているのかについて確認しておきます。

大正七(一九一八)年に東京の出版社、東光園から発行された写真集『東海道 広重画五十三次現状写真対照』(編集・発行 秋好善太郎)は、保永堂版で広重が描いた場所を当時に求め、広重の構図に近づけたアングルで撮影した、いわば東光園版五十三次です。

この中で四日市は、上流から三滝橋を写し、無理やり「三重川の図」の構図に近づけています(図2)。



図2『東海道 広重画五十三次現状写真対照』四日市(館蔵)

表1 保永堂版東海道五十三次に描かれた風景

|    | 題名        | 風景                         | 分類  |   |
|----|-----------|----------------------------|-----|---|
| 1  | 日本橋 朝之景   | 日本橋を南詰から描く                 | 街道  | 橋 |
| 2  | 品川 日之出    | 宿場入口と品川沖を江戸側から描く           | 宿場町 |   |
| 3  | 川崎 六郷渡舟   | 宿場の手前、六郷川の舟渡しを江戸側から描く      | 街道  | 川 |
| 4  | 神奈川 台之景   | 宿場のある高台を江戸側から描く            | 宿場町 |   |
| 5  | 保土ヶ谷 新町橋  | 宿場入口の帷子川にかかる板橋を江戸側から描く     | 宿場町 | 橋 |
| 6  | 戸塚 元町別道   | 宿場内、鎌倉道との分岐にある橋を江戸側から描く    | 宿場町 | 橋 |
| 7  | 藤沢 遊行寺    | 宿場内、境川に架かる板橋を京都側から描く       | 宿場町 | 橋 |
| 8  | 平塚 縄手道    | 宿場出口の東海道と花水橋を江戸側から描く       | 街道  |   |
| 9  | 大磯 虎ヶ雨    | 宿場入口を江戸側から描く               | 宿場町 |   |
| 10 | 小田原 酒匂川   | 宿場の手前、酒匂川の川越しを江戸側から描く      | 街道  | 川 |
| 11 | 箱根 湖水図    | 宿場の手前、元箱根に向かう東海道を京都側から描く   | 街道  |   |
| 12 | 三島 朝霧     | 宿場内、三島大明神の鳥居前を江戸側から描く      | 宿場町 |   |
| 13 | 沼津 黄昏図    | 宿場入口の狩野川沿いの東海道を江戸側から描く     | 宿場町 |   |
| 14 | 原 朝之富士    | 宿場を過ぎて、富士山に見える街道を、江戸側から描く  | 街道  |   |
| 15 | 吉原 左富士    | 宿場の手前、依田橋、今泉の東海道を江戸側から描く   | 街道  |   |
| 16 | 蒲原 夜之雪    | 宿場内、夜の雪と町並みを描く             | 宿場町 |   |
| 17 | 由比 薩埵嶺    | 宿場を過ぎて、峠から見える富士山を京都側から描く   | 街道  |   |
| 18 | 奥津 興津川    | 宿場の手前、興津川の歩行渡しを上流側から描く     | 街道  | 川 |
| 19 | 江尻 三保遠望   | 宿場を過ぎて、東海道から清水湊と三保松原を描く    | 風景  |   |
| 20 | 府中 安部川    | 宿場を過ぎて、安倍川の歩行渡しを江戸側から描く    | 街道  | 川 |
| 21 | 丸子 名物茶店   | 宿場はずれにあるとろろ茶屋を江戸側から描く      | 街道  |   |
| 22 | 岡部 宇津之山   | 宿場の手前、宇津谷峠を京都側から描く         | 街道  |   |
| 23 | 藤枝 人馬継立   | 宿場内の問屋敷を描く                 | 宿場町 |   |
| 24 | 嶋田 大井川駿岸  | 宿場を過ぎて、大井川の川越しを江戸側から描く     | 街道  | 川 |
| 25 | 金谷 大井川遠岸  | 宿場の手前、大井川の川越しを江戸側から描く      | 街道  | 川 |
| 26 | 日坂 佐夜ノ中山  | 宿場の手前、大向村の夜泣石を京都側から描く      | 街道  |   |
| 27 | 掛川 秋葉山遠望  | 宿場を過ぎて、大池川にかかる大池橋を江戸側から描く  | 街道  | 橋 |
| 28 | 袋井 出茶屋ノ図  | 宿場入口の出茶屋を京都側から描く           | 街道  |   |
| 29 | 見附 天竜川図   | 宿場を過ぎて、天竜川の舟渡しを江戸川から描く     | 街道  | 川 |
| 30 | 浜松 冬枯ノ図   | 宿場入口にあるざざんざの松あたりを江戸側から描く   | 街道  |   |
| 31 | 舞坂 今切真景   | 宿場を過ぎて、渡船場と浜名湖を江戸川から描く     | 街道  |   |
| 32 | 荒井 渡舟ノ図   | 宿場の手前、渡船場到着前の渡舟を江戸側から描く    | 街道  | 海 |
| 33 | 白須賀 汐見阪図  | 宿場の手前、汐見坂を京都側から描く          | 街道  |   |
| 34 | 二川 猿ヶ馬場   | 宿場の手前、境宿新田の立場を江戸側から描く      | 街道  |   |
| 35 | 吉田 豊川ノ橋   | 吉田城と豊川橋(吉田橋)を江戸側から描く       | 街道  | 橋 |
| 36 | 御油 旅人留女   | 宿場内の旅籠屋の家並みを描く             | 宿場町 |   |
| 37 | 赤阪 旅舎招婦ノ図 | 宿場内の旅籠屋の内部を描く              | 宿場町 |   |
| 38 | 藤川 棒鼻ノ図   | 宿場入口を京都側から描く               | 街道  |   |
| 39 | 岡崎 矢矧之橋   | 宿場を過ぎて矢作橋と岡崎城を京都側から描く      | 街道  | 橋 |
| 40 | 池鯉鮒 首夏馬市  | 宿場手前の東海道脇にある松林での馬市を描く      | 風景  |   |
| 41 | 鳴海 名物有松絞  | 宿場の手前、有松村の家並みを京都側から描く      | 宿場町 |   |
| 42 | 宮 熱田神事    | 熱田神宮一の鳥居か浜鳥居で祭りの様子を描く(不詳)  | その他 |   |
| 43 | 桑名 七里渡口   | 宿場入口、七里の渡し場を描く             | 宿場町 | 海 |
| 44 | 四日市 三重川   | 三重川の河口部に架かる橋を描く(不詳)        | その他 | 橋 |
| 45 | 石薬師 石薬師寺  | 宿場を過ぎた石薬師寺を京都側から描く         | 宿場町 |   |
| 46 | 庄野 白雨     | 宿場手前、鈴鹿川の土手を通る場所を江戸側から描く   | 街道  |   |
| 47 | 亀山 雪晴     | 京口御門(宿場出口)へ登る東海道を京都側から描く   | 街道  |   |
| 48 | 関 本陣早立    | 宿場の本陣内部の光景(伊藤本陣、川北本陣のいずれか) | 宿場町 |   |
| 49 | 阪之下 筆捨嶺   | 宿場の手前、藤ノ棚立場と筆捨山を京都側から描く    | 街道  |   |
| 50 | 土山 春之雨    | 宿場の手前、田村川を渡る板橋を江戸側から描く     | 街道  | 橋 |
| 51 | 水口 名物干瓢   | 宿場前後の東海道沿いの村を描く(不詳)        | 街道  |   |
| 52 | 石部 目川ノ里   | 宿場を過ぎて目川立場を京都側から描く         | 街道  |   |
| 53 | 草津 名物立場   | 宿場を過ぎて矢倉村の立場にある姥が餅屋を描く     | 街道  |   |
| 54 | 大津 走井茶店   | 宿場、逢坂山を過ぎて走井立場を江戸側から描く     | 街道  |   |
| 55 | 京師 三条大橋   | 三条大橋と東山                    | 街道  | 橋 |

無理やりというのは、実際の東海道は三滝橋の左右(南北方向)に伸びているにもかかわらず、河原に降りる坂道(西向き)とつなげて東海道に見せようとしているからです。しかしこれは、そうするより他なかったと考えるべきでしょう。

四日市の写真の説明には「(前略)さて広重の図に註して三重川とあれども今日四日市には此の名称の川なければ恐らくは三滝川の誤りなるべしと想像せらる。此の辺り今や何等当年の佛おぼかけの認め得らるなく橋の南北人家建並び全く其の面目を一新した

り。」(ふりがなは筆者)とあることから、まず三重川は三滝川の誤りと考え、東海道が三滝橋を南北に通っていることもわかったうえで、「三重川の図」の構図に近づけたのだろうと推測します。

この写真が示しているのは、大正時代の三滝橋を記録として残したということ、この本が出版された当時、「三重川の図」の場所が不明だったということ、しかしこの本の影響もあってか、この後「三重川の図」の場所を、三滝橋と考える人が増えたと考えられます。

「三重川の図」の場所を考察する前に、保永堂版五十五枚に描かれた風景について確認します。

保永堂版で広重が描いたもの

江戸日本橋から京師けいし三条大橋まで五十五枚の作品に描かれた題材を、宿場町を描いたもの(宿場町)、東海道を描いたもの(街道)、東海道は描かず道中で見える風景を描いたもの(風景)、東海道とは無



関係のもの(その他)の四分類にしたのが表1です。これを見ると、街道を描いたものが三十五枚と圧倒的に多く、続いて宿場町十六枚、風景二枚、その他二枚となっています。

五十五枚の作品の中で、橋が目立って描かれたものは十枚。そのうち橋の名が題名となっているのは、日本橋朝之景、保土ヶ谷新町橋、吉田豊川ノ橋、岡崎矢矧之橋、京師三条大橋の五枚です。保土ヶ谷以外の橋は世に知られた橋であり、画題となるのも納得です。逆に橋の名が付かない五枚は、戸塚元町別道、藤沢遊行寺、掛川秋葉山遠望、四日市三重川、土山春之雨です。これらは、単に橋のある風景を越えるものとして描いたと考えます。

東海道の経路となる川や海が描かれているもので橋のない物は、川崎六郷舟渡、小田原酒匂川、興津興津川、府中安部川、嶋田大井川駿岸、金谷大井川遠岸、見附天竜川図、荒井渡舟ノ図、桑名七里渡口の九枚です。

東海道を描いた三十五枚の中で、舟渡し、歩行渡しが目立つのは、それが旅において極めて印象深い行為だからでしょう。同様に橋を描く場合も、構造物としての大きさ、長さが特に印象的で、名所となり得るからでしょう。長大な橋自体が名所(画題)になるという当時の当たり前な感覚は、至る所に橋があり、その便利さに気づくことも稀な現代人には盲点といえるでしょう。

橋を描いた場合は、題名に橋の名を記すことが多く、四日市のように橋を描いているのに、三重川と記されているのは、描かれた橋が名もなき橋だったからと考えられます。川の名が題名とされる七枚の

うち、「三重川の図」以外は、橋がなく、徒歩渡しや舟渡しであることも、「三重川の図」が他にはない特別な事情を持っているのではと窺わせます。

### 「三重川の図」の場所はどこか

それでは、当時の絵画資料をもとに、「三重川の図」の場所が四日市のどこにあるのかを探ってみたいと思います。

表1でみたとおり、保永堂版はその多くが東海道そのもの(宿場を含む)と東海道から見える風景を描いています。それは旅人で賑わう光景であったり、夜や雨、雪などで閑散とした街道であったりしています。これらに旅籠、問屋場、茶店、松並木、道標などの東海道をイメージさせる記号ともいべきモチーフや、名所旧跡として知られる風景を描きこむことで、東海道の情景を表しています。しかし、「三重川の図」は有名な場所でもなければ、東海道の記号となるようなモチーフも描かれていません。

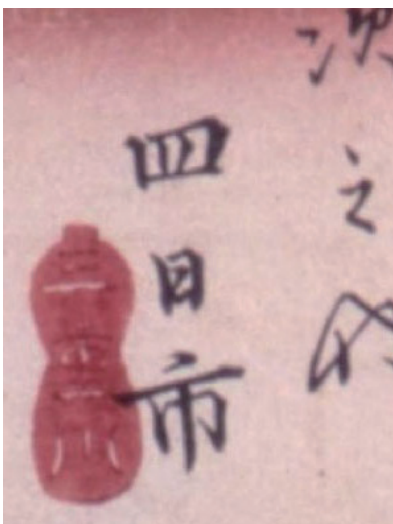


図3 瓢箪形の中に「三重川」の白文

「三重川の図」は、陰刻で「三重川」と彫り込んだ瓢箪形の印が押されていることから、「四日市三重川」とも呼ばれています(図3)。三重川は、現在の三滝川のことですが、地元では三重川とは言いません。にもかかわらず、三滝川を三重川としているのは、『東海道名所図会』や『伊勢参宮名所図会』(いずれも寛政九(一七九七)年刊)に四日市の名所の一つとして記されており、広く知られていたからと考えます。つまり、地元では馴染みのない名前であっても、当時の江戸をはじめとする都市部に住む人々には、これら版本によって三重川として認知されていたと考えられるのです。

「三重川の図」の小さな板橋は、この三重川に架かる橋と思われたことから、これまでは東海道が三滝川をまたぐ三滝橋と考えられていました。しかし、保永堂版の約三十年前に描かれた幕府作成の「東海道分間延絵図」(図4、文化三(一八〇六)年完成、以下「延絵図」)を見ると、三滝橋は大きな土橋として描かれています。ちなみに、ここでは川の名前は「御滝川 一名三重川」(傍点筆者)と記されています。そのほかの史料からも三滝橋は長さが五十間(約九十メートル)ほどもある大橋であることがわかっており、広重が描いたような小さな板橋ではありません。

土橋と板橋は、橋板に土を被せるか、板のままかの違いですが、土橋のほうは橋板に土を被せるため構造的にも頑丈に作られ、耐久性は板橋より上です。もちろん、東海道にも板橋はありますが、橋幅が少なくとも二間(約三・六メートル)程度は必要で、「三重川の図」に描かれる小さな板橋は、東海道のような



な通行の多い道に架かる橋には見えません。

これらのことから「三重川の図」の場所は東海道ではないと考えます。

次に東海道から見える風景として描かれた可能性を探ります。

描かれているのは川に迫り出した細い道と、それに続く小さな板橋。板橋の手前には小舟、細い道の向こうには葦原、その先には民家の屋根と舟の帆柱が見えます。これらの風景から導き出せる場所は、海に近い河口部、あるいは四日市湊の周辺となるでしょう。東海道は河口部の上流（西側）およそ一キロメートルの地点を通っていますから、描かれた風景を東海道から直接見ることは不可能です。

以上のことから、「三重川の図」の場所は、東海道でもなく、また東海道から見える風景でもないと言えます。

### 候補となる場所

ここで「三重川の図」の場所に関して、これまで考えられてきた説を、旧四日市を語る会代表の岡野繁松氏の論考「広重の描く四日市を歩く」から紹介します。

三滝橋：四日市の三滝川に架かる東海道の橋

開栄（湊）橋：四日市の阿瀬知川に架かる浜往

還の橋

長田橋：日永の長田川に架かる東海道の橋

内部橋：小古曾の内部川に架かる東海道の橋

海蔵橋：東阿倉川の海蔵川に架かる東海道の橋

これらの説は、根拠となる史料がないか、あったとしても現在では確認できないものに依っています。そのうえで岡野氏は「広重は四日市乗りと言われている四日市湊を表そうとして、海岸筋を描いたのはまちがいないであろう」、「広重は湊橋（現、開栄橋）を描き、当時那古の浦と称していた辺りの農家と船をあしらったのではないか。そして彼はこのあたりの川が三重川（三滝川）にあたると思い、その名を使ったのではないだろうか。」と推論された。筆者もこの推論に概ね賛成します。

なお、岡野氏の論考のきっかけとなったのは、氏が主宰する「旧四日市を語る会」が平成八（一九九六）年五月十九日に実施したイベント、「広重の描く四日市を歩く」でした。約六十人の参加者と共に、絵の舞台と考えられる複数の場所で、郷土史家や参加者が思い思いの説を語るといふものでした。筆者もこの日、招かれて自説を披露しました。

それまで筆者は、「三重川の図」の場所を探すことに特段興味を持っていませんでした。それは、描かれた場所がありふれた風景であり、場所を特定できそうなものもなく、そのうえ、広重がイメージだけで描いたものかも知れないと考えていたからです。しかし、このイベントに多くの方が申し込まれたことを聞き、きちんと調べてみようと思ひ直しました。そしてイベント当日、あの絵の場所は三滝橋ではないことと、確証はないものの湊（海）に近い所だろうと話しました。業務の都合で、午前中だけの参加でしたが、参加された皆さんの熱い思いを十分に感じることができました。その時の様子や、イベント後に寄せられた参加者各自の考察などは『旧

四日市を語る第八集』をご覧ください。

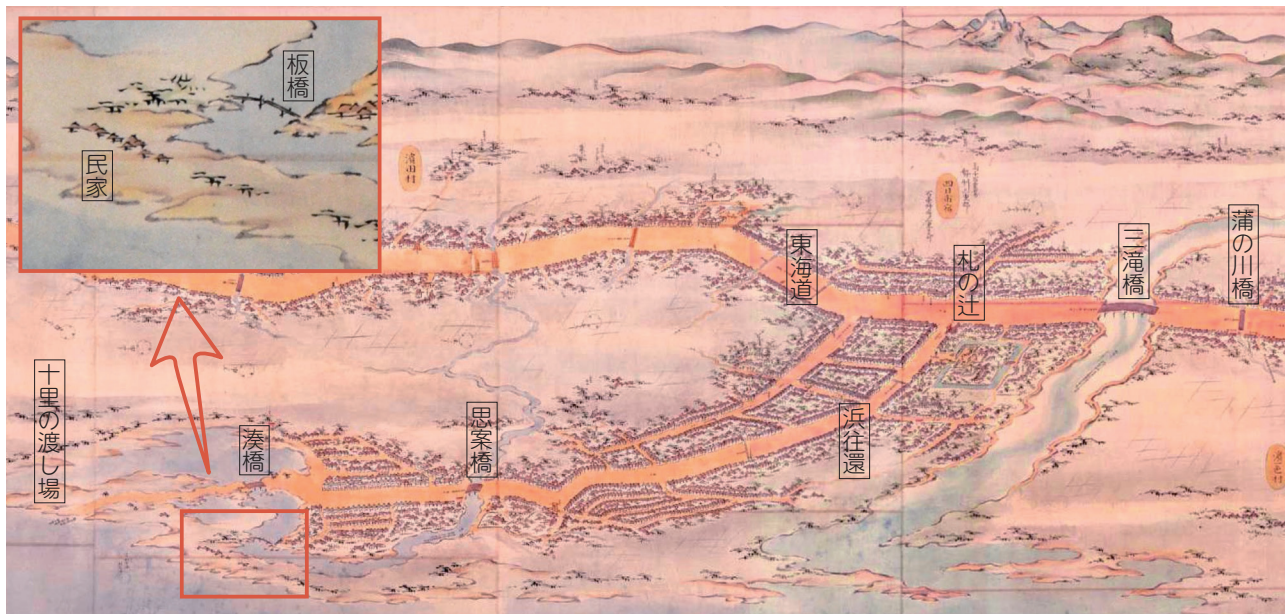
また、四日市郷土史研究会会長の相山満氏も「東海道四百年 広重の旅情、浜風吹く四日市」の中で「三重川の図」の場所の候補として三滝橋、思案橋、長田橋を挙げながら、「だが広重の四日市三重川の図を眺めていると、初夏の近づいた曇った空から温かい海風が吹いている。時々突風となつて旅人の傘を飛ばす。この浜風は急に風渡つて、沖に白く立ちこめた濛気が大きく揺れる。すると雲烟の中から御殿や鳥居や高貴な行列が現れる。昔から東海道でもこの地方だけに現れる『那古の渡り』と呼ばれる蜃気楼がちかづいているのかもしれない。この浜風吹く四日市を、広重はその得意とする魔法の筆を使って、『東海道五十三次』なるファンタジアの中に描き出したのではないだろうか。」と、湊の風景ではあるものの、広重の想像の産物ではないかとされています。

### 橋の数

「三重川の図」の場所の考察に戻ります。東海道でもなく、そこから見える風景でもないとすると、一体どこなのでしょう。ありふれた風景のようですが、描かれている橋がどこにあるのかが分かれば、解決の糸口になるはずですが。

江戸時代後期の四日市の域内（四日市町）に存在した橋は、延絵図を見ると東海道の三滝橋、蒲の川橋の他に、浜往還（豎町通り）の思案橋、湊橋、さらには湊橋の下（北）にある小さな板橋の五つが確

図4 「東海道分間延絵図」 四日市部分（複製・館蔵、原資料東京国立博物館蔵）



認できます（水路にかかる伏せ板や石蓋も橋とされる場合がありますが、見た目で橋と感じるほどではありませんので、ここでは対象としません）。

橋は社会資本であり、長期にわたる維持管理も必要のため、生活上不都合だからといって、そう簡単に架けられるものではありません。実際、四日市においても三滝川に架かる橋は、明治二十四（一八九一）年に慈善橋が下流部に架けられるまでは三滝橋だけでした。

前述したように、東海道にかかる橋と考えるには橋幅が狭いことから、三滝橋、浦の川橋は除き、残りの三つの橋から探してみよう。

なお、岡野氏や相山氏の論考にもあるように、四日市宿以外の南北に延びる東海道のどこの橋を描いた可能性も考えられなくはありませんが、そうであれば、保永堂版の画面から感じる寂しい雰囲気、特に海に近いような雰囲気を感じられる場所を富田や日永に探さなくてはなりません。しかし、延絵図を見る限りそういう風景は見当たりません。

東海道に直行する浜往還（豎町通り）は四日市町の中心部を東西に通って湊までおよそ十町（約一・一キロメートル）の距離があります。この道にある思案橋と湊橋は、延絵図には土橋として描かれています。三滝橋と同様に、約三十年前に土橋だった橋が規模の小さな板橋になるとは考えにくいことと、湊と四日市町の中心部を結ぶ浜往還は人通りの多い道であることを考えると、この二つの橋も考えられません。最後に、湊橋の北に位置する小さな板橋が残りました。この場所をよく見ると、「三重川の図」に見られるような舟が停泊する場所（川と海）があ

り、砂洲の上には茅葺のような屋根の民家もあります。つまり、「三重川の図」に描かれた全ての要素がここにはあるのです。

この板橋は、四日市町の庄屋を勤めた井島家の史料<sup>11</sup>からも確認できます（図5）。保永堂版の刊行時期に近い天保三（一八三二）年以前と考えられる湊改修の計画図に描かれた小さな橋は、川の中央部のみに架けられていて、橋には両岸からの墨線が伸びていきます（図5-2）。この墨線は堤を表していることから、迫り出し道と板橋という「三重川の図」に描かれた橋そのものが、ここに存在することが判明しました。

以上のことから、「三重川の図」に描かれた橋が、延絵図や井島家の史料に描かれた湊橋の北に位置する小さな橋であることは間違いないでしょう。

延絵図を詳細に見ると思案橋の東側の納屋町とよばれる一帯の東北隅に板橋が架かっています。納屋町は漁業や廻船などに従事する人が多く住んだ場所で、その東（海側）にできた砂洲上に民家が建ち並びようになったことから、橋が作られたのでしょう。なお、この川の三滝川に並行する部分は、近代に入って工場を建てるため両岸を埋め立てたので川幅が狭くなっています。それを踏まえると、板橋は現在の稲葉橋、あるいはその北側付近にあったと考えるこ



図5-2の部に橋の墨線が取り出され、拡大し、板橋の堤を表現している。



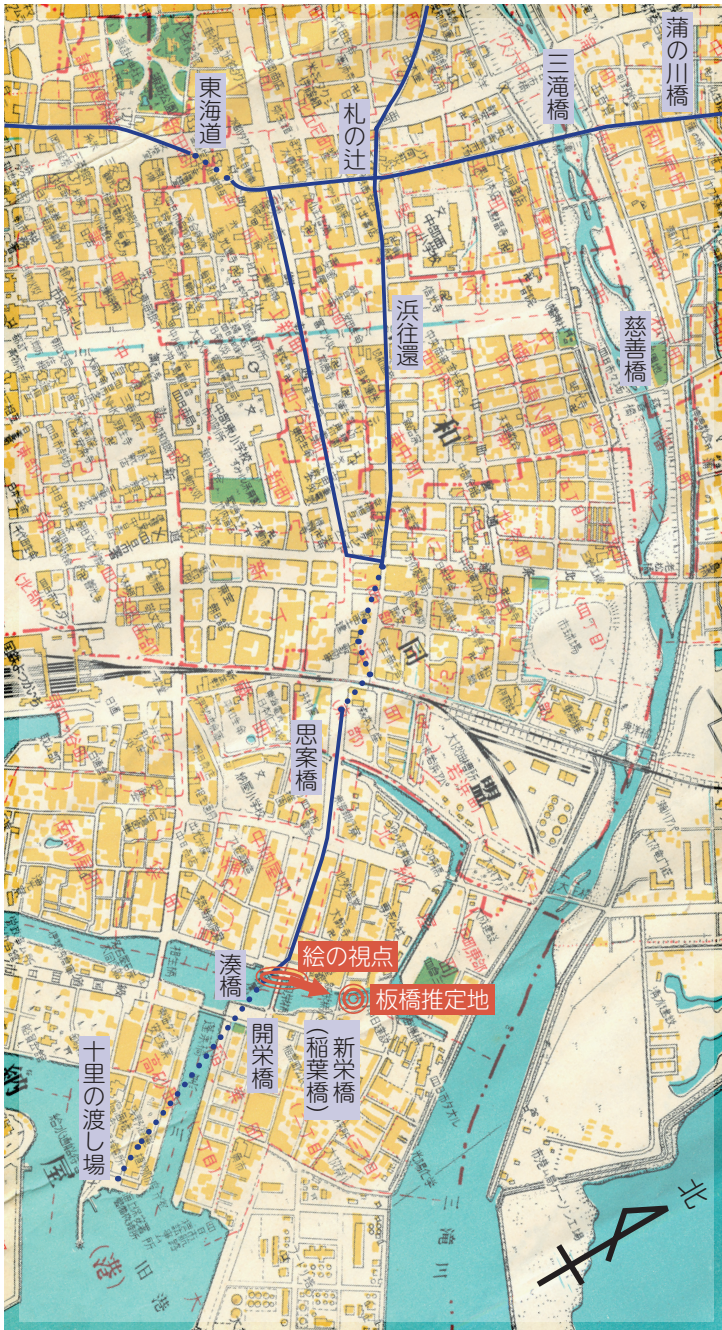


図6 『四日市市街図』(部分)に江戸時代の主要な道筋を落とし込んだ。点線部分はすでに無くなった道。札の辻が宿場町の中心。江戸時代後期の町は主要道路に沿って形成されており、東西に細長い町だった。図4の延絵図では紙幅に制限があるため四日市町は南(左)に向かって伸びているように描かれる。「三重川の図」は、湊橋から北東方向を眺めた(矢印)風景と考えると、図7のように見える。

図7 開栄橋から北を望む。ガードレールの中央が稲葉橋。コンビナートの煙突や蒸留塔が、舟の帆柱に替わって林立する。



図5 四日市町の庄屋、井島家に残された江戸時代後期の湊改修計画図(館蔵)。湊橋(中央)の右にある橋が延絵図の板橋と一致する。黄色は納屋町の範囲、緑は新田、灰色は浅くなった湊部分。湊機能を回復させるために川の浚渫をし、湊口の付け替え(左下)と三滝川からの取水(右上)を計画し、付け替え工事は完成した。枠囲いにある橋(図5-2)は延絵図の板橋にあたる。



ともできます。しかし、一般的に橋は道筋の一部でもあり、道筋に面して家屋が建ち並ぶようになると、架け替える時も、利便性等の理由から同じ場所に架けがちです。これらのことから、稲葉橋が元々の板橋の場所ではなかったかと推量します。

稲葉橋は、昭和三十五(一九六〇)年改訂の『四日市市街図』(図6、文化興業社発行)には新栄橋とあり、納屋運河の上に架かる約二十メートルの橋でした。明治六(一八七三)年に始まった稲葉三右衛門による湊の修築で、湊橋は掛け替えられて開栄橋と名付けられました。そして後に板橋も架け替えられて、新栄橋と名付けられたのでしよう。昭和

四十六(一九七二)年頃<sup>13</sup>までに開栄橋以北の運河が埋め立てられて納屋公園が作られ、新栄橋は納屋公園を横断する道路に変わりましたが、分断された公園の連絡通路として道路中央部に小さな橋(約三メートル)が架けられました。これが、昭和四十五(一九七〇)年に架けられた稲葉橋(図7)です。

運河の両岸から道路が迫り出し小さな橋につながる光景は、偶然とはいえ「三重川の図」のようです。

「三重川の図」に描かれた板橋とそれに取りつく土止めをした迫り出し道(堤)は、本来なら旅人が通るはずのない場所です。このような所に旅人を描



き入れたのは、東海道物の浮世絵とするための広重の工夫と考えたいのです。描かれた場所は突き止められましたが、なぜこの場所が保永堂版で四日市の風景として選ばれたのかについて、次に考えてみます。

## 東海道のもう一つのルート

東海道には正規の街道と、旅のしやすさなどで利用される脇街道がありました。今切の渡しを避ける姫街道、七里の渡しを避ける佐屋街道がよく知られています。七里の渡しにはもう一つの脇経路として宮宿と四日市宿を結ぶ十里の渡し（図8）がありました。十里の渡しは、東海道の正規経路ではないものの、徳川家康に免許された由緒を持つ幕府公認の経路でした。

天正十（一五八二）年、本能寺の変に際して、泉州堺から伊賀越えをした家康ら一行を、船で知多まで送り届けたのが四日市の人だったと伝えられ、その縁で四日市と宮宿を結ぶ十里の渡しや、海上での鳥縄漁が認められたと伝えられます。<sup>14</sup>

宮宿から四日市宿へ、旅人が船で乗り込めば、宮と桑名を結ぶ海上七里に加え、桑名から四日市までの陸路三里八町分を一気に進むこととなります。それゆえ十里の渡しと言われたのでしょう。

十里の渡し場から西に十町ほど行くと東海道で



図8 七里の渡しと十里の渡し

す。その道筋に架かるのが前述した湊橋と思案橋。思案橋は伊賀越えの際、家康が三河へ帰国するのに、陸路をとるか海路をとるかで思案した場所と伝えられています。

旅人が十里の渡し場（湊）から東海道へ向かう途中、湊橋から北側を眺めると、「三重川の図」に描かれた板橋が見えます。広重は、船で四日市に着いた旅人が必ず通る湊橋から見えるその風景を、「街道から見える風景」として、東海道物の題材にふさわしいと考えたのではないのでしょうか。

保永堂版で描かれた風景のうち、東海道でも、東海道から見える風景でもないと考ええる「三重川の図」は、他の宿場町と異なる四日市だけにある特別な事情、つまり海上の脇経路として使われる十里の渡しを利用した時にだけ見える特別な風景だったのです。

## なぜ三重川か

一つ残念なのは、この板橋が架かる川（前述の納屋運河のこと）は阿瀬知川であって、三重川（三滝川）ではないということだ。

岡野氏同様、湊から川を渡って東海道に向かうその川を、三重川と勘違いしたのではないかと考えたくなります。しかし勘違いしたのは広重ではなく、板元の保永堂（竹内孫八）ではないかと思うのです。

東海道物の浮世絵は保永堂版が大ヒットしたことを受け、その後多くの板元からいくつも作られました。そのため、なるべく同じ物にならないよう、風

景に人物を加えたりした各地の歴史や名所などを題材にしたりして、趣向を変えて刊行されました。その際に、名所図会等の版本を参考にしていることはよく知られています。<sup>15</sup>

例えば、初代広重と三代豊国が描く『双筆五十三次』は、広重の風景画と豊国の人物画を一枚の絵に描いたものですが、四日市を描く作品（図9）には、広重による四日市湊（蜷気楼）と、豊国による二人の絵があります。これは、歌舞伎「軍法富士見西行」の登場人物である西行と娘の写絵姫です。なぜこの二人が四日市の絵に登場したのかというと、四日市から北西に五里の所、朝明郡田口村（現三重県菟野町田口）に西行庵があったことが『東海道名所図会』に載せられていたからと考えます。

ちなみに『東海道名所図会』の四日市宿で取り上げられている項目は、諏訪神社、三重川、東湊山建福寺、那古海蜃楼、垂坂観音、志氏神社、西行菴蹟、名物煬蛤、町屋川です。蜷気楼は広重に取り上げられましたが、人物では広く知られた西行がこの地域に関係することがわかったため、選ばれたので

図9 双筆五十三次 四日市  
歌川広重、三代歌川豊国



表2 東海道物の四日市で描かれた風景

| 制作年                    | 作品 板元               | 風景                | 作者             |
|------------------------|---------------------|-------------------|----------------|
| 天保4年(1833)頃            | 東海道五十三次 保永堂竹内孫八     | 四日市湊付近の板橋         | 歌川広重           |
| 天保10年(1839)            | 美人東海道 佐野屋喜兵衛        | 背景が保永堂版           | 歌川国貞<br>(三代豊国) |
| 天保11年(1840)            | 狂歌入東海道 佐野屋喜兵衛       | 内部橋と采女村           | 歌川広重           |
| 天保13年(1842)            | 行書東海道 江崎屋辰蔵、吉兵衛     | 日永の追分             | 歌川広重           |
| 天保年間(1830~44)          | 天馬屋版五十三次 天馬屋喜兵衛     | 四日市湊付近の板橋         | 歌川貞広           |
| 天保14~弘化4年<br>(1843~47) | 東海道五十三対 小嶋屋重兵衛      | 那古の海蟹気楼           | 三代歌川豊国         |
| 弘化4年(1847)             | 隸書東海道 寿鶴堂丸屋清次郎      | 日永の追分             | 歌川広重           |
| 弘化年間(1844~48)          | 有田屋版東海道 有田屋清右衛門     | 三滝橋、那古の浦          | 歌川広重           |
| 嘉永元年(1848)             | 鳶屋版東海道 鳶屋吉蔵         | 日永の追分             | 歌川広重           |
| 嘉永年間(1848~54)          | 人物東海道 村田屋市五郎        | 四日市湊              | 歌川広重           |
| 安政2年(1855)             | 五十三次名所図会 鳶屋吉蔵       | 三滝橋、那古の浦          | 歌川広重           |
| 安政2年(1855)             | 双筆五十三次 丸屋久四郎        | 那古浦蟹気楼<br>軍法富士見西行 | 歌川広重<br>三代歌川豊国 |
| 安政3年(1856)             | 東海道張交図会 山口藤兵衛       | 那古の浦蟹気楼           | 歌川広重           |
| 文久3年(1863)             | 御上洛東海道 越村屋平助        | 三滝橋、那古の浦          | 歌川芳艶           |
| 文久3年(1863)             | 御上洛東海道 未詳           | 日永の追分             | 歌川広重           |
| 慶応元年(1865)             | 末広五十三次 大黒屋金之助、金次郎   | 那古の浦蟹気楼           | 二代歌川国貞         |
| 慶応元年(1865)             | 東海道五十三駅 丸屋鉄次郎、広岡屋幸助 | 四日市宿の家並み          | 二代歌川広重         |
| 明治5年(1872)             | 書画五十三駅 沢村屋清吉        | 蟹気楼、女人旅           | 歌川芳虎           |
| 明治8年(1875)             | 東海名所改正道中記 山崎屋清七     | 高砂町貸席             | 三代歌川広重         |

しよう。この人物選定が豊国自身によるものなのか  
 と言え、おそらくは板元(丸屋久四郎・丸久)の  
 企画と考えた方が良くはないでしょうか。豊国  
 は前名の国貞の頃、文化十二(一八一五)年に歌舞  
 伎「増補富士見西行」の浮世絵を描いていますので、  
 この登場人物のことは知っていたでしょう。しかし、  
 そのストーリーに四日市との関連性はないのです。  
 東海道物の浮世絵は、一人の絵師に描かせる場合

もあれば、複数の絵師に分担させる場合もあります。  
 そうなれば、全体をコーディネートする必要があり、  
 それができるのは板元以外にはないと考えます。  
 「三重川の図」の題の由来になった三重川は、地  
 元では三滝川と呼ばために名所としての意識は希薄  
 ですが、『東海道名所図会』や『伊勢参宮名所図会』  
 に取り上げられ、ヤマタケルにちなむ三重の名を  
 持つ川ということで名所扱いはされたと考えます。こ  
 れら版本の情報をしっかりと読み込ん  
 だ、しかし土地勘のない人物(おそらく  
 板元)が、広重の描いた図を見て、  
 三重川を描いたものと早合点して題名  
 としたのではないかと思います。

### 東海道物に描かれた四日市

最後に、広重が「三重川の図」で描  
 いた場所が、その後の東海道物にも描  
 かれているのかを確認しておきます。

四日市を描いた東海道物の浮世絵は  
 保永堂版以後で、三十種類を超えるとい  
 われています。表2はそのうちの代  
 表的な十九枚を確認したものです。<sup>17</sup>

湊または那古の浦が描かれているの  
 は、広重の保永堂版、国貞の美人東海  
 道、貞広の天馬屋版、三代豊国の東海  
 道五十三対、広重の有田屋版東海道、  
 広重の人物東海道、広重の五十三次名  
 所図会、広重・三代豊国の双筆五十三

図10「人物東海道 四日市」 歌川広重



次、広重の張交図会、芳艶の御上洛東海道、二代国  
 貞の末広五十三次、芳虎の書画五十三駅の十二枚で  
 す。残り七枚のうち、四枚が日永の追分、一枚が内  
 部橋、二枚が宿場町となっています。

「三重川の図」と同じような構図は美人東海道と  
 天馬屋版です。人物東海道(図10)には橋の絵はな  
 いものの、よく似た場所のようです。

このことから、四日市宿の特徴として湊や海が多  
 く描かれ、橋もまた三重川を描く際のモチーフとな  
 っていることがわかります。いくつかの作品は三  
 重川を手前に大きく描き、奥に小さく帆柱を描くこ  
 とで那古の浦(四日市湊)の存在を表しています。「三  
 重川(橋)と湊」という記号は四日市のイメージとし  
 て定着し、後世の人が「三重川の図」の場所を三  
 滝橋だと考えるようになるのもうなずけます。

次に多い日永の追分は、伊勢参宮が旅の目的とな  
 りやすく、人々に受け容れやすいことと、東海道と  
 参宮道の分岐という四日市の特徴が表現できるから



でしょう。ちなみに広重より先に東海道物を描いた葛飾北斎は、現在確認されている四種全てが日永の追分を描いています<sup>18</sup>。

「三重川の図」で広重が描こうとしたのは、賑わいとは対極にある寂寥とでもいうべき雰囲気でしたが、保永堂版以後に出された東海道物の多くは、行列や旅人で賑わう風景に変わっています。絵師の感性よりも、売れそうな作品を作る板元の方向性が優先されたとみるべきでしょう。保永堂版の中で、庄野白雨、四日市三重川、蒲原夜之雪など現代において名作といわれる作品は、その後の東海道物では賑わいを感じさせる題材に変わっており、現代人から見ると、どれも同じような作品に見えます。しかしこれは、浮世絵を美術作品とみる現代人の感覚と、当時の人々が浮世絵に求めていたものとの間に隔たりがあることを意味すると思われまます。

広重に傾倒し、生涯に東海道五十三次を三度も旅した大正・昭和に活躍した画家池田遙邨<sup>19</sup>は、昭和三(一九二八)年に初めて東海道を徒歩で旅し、京都から東京へ向かう上り旅<sup>20</sup>で書き溜めたスケッチを元に、昭和六(一九三一)年に「昭和東海道五十三次」五十七枚を完成させました。その作中、四日市では雪景色の開栄橋を描いています(図11、以下「開栄橋の図」)。

遙邨が広重の作品の影響を受けていることを感じさせる大胆な構図で、開栄橋の橋脚を大きく手前に描き、その脚元の運河には小舟、奥には相生橋と高砂町、稲葉町の家並みが描かれています。橋の上には傘をさす女性と合羽を着た子の二人が描かれ、保



図11「昭和東海道五十三次 四日市開栄橋」池田遙邨 倉敷市立美術館HPより

永堂版で描かれた要素をなるべく取り込もうとしたようにも感じられます。

この絵は、遙邨が昭和四(一九二九)年にパリの日本美術展覧会に出品した「雪の日」とほぼ同じ構図ですが、「雪の日」に描かれている開栄橋の欄干や、蓬萊橋は省略され、橋の人物も三人から二人になったことで、構図の大胆さがより際立っています。遙邨にとつて、四日市で見たこの風景はよほど印象的だったのでしょう。

「開栄橋の図」に描かれている風景は喧騒とはほど遠く、雪景色の中、舟の棹取りの音まで聞こえきそうです。強い風が葦をなびかせる音が聞こえるような「三重川の図」と対照的に思えるのは筆者だけでしょうか。

遙邨の「昭和東海道五十三次」は『東海道 広重画五十三次現状写真対照』のように、広重が描いた場所を探すものではなく、かつての宿場町や東海道を歩き、それぞれの場所を題材を探して描いたものです。それゆえ、四日市の風景を三滝橋ではなく開

栄橋で描いたのは単なる偶然なのか、はたまた広重に傾倒した画家の感性の為せる仕業なのか、興味は尽きません。

おわりに

広重が実際にこの風景を見たのかどうかは、今後の研究を俟ちたいと思いますが、この考察によって、「三重川の図」に描かれた場所は現在の稲葉橋通りであり、その視点は湊橋付近にあったことを明らかにすることができました。

ありふれた風景と思われた「三重川の図」を丹念に読み解くと、そこには当時の四日市の状況と合致する情報が描き込まれていることが判明し、さらにそれが地元に残る史料からも裏付けられたことは、この考察で得られた大きな成果でした。

保永堂版をはじめとする東海道物の浮世絵が、江戸時代の人々の支持を得たのは、旅への憧れを持つ人々に訴求する情報、それは単なるイメージではなく、リアリティを感じさせる価値ある情報が、浮世絵という媒体を通じてもたらされたからではないでしょうか。現代人が浮世絵を美術作品として捉えるのとは異なり、当時の人々は、その画面に描かれた情報を自他の知識、言い換えれば「江戸の衆知」とでも言うべき知力を駆使して読み解いていたのではないかという思いを、この考察を通して一層強くしました。

(ひろせ たけし 学芸員、副館長)



後註

1 保永堂版以外にも、歌川広重の「行書版」「隷書版」「狂歌入」と通称される東海道物が知られている。他にも歌川国芳らの合作「東海道五十三対」、広重・三代歌川豊国合作の「双筆五十三次」、三代豊国の「役者見立東海道五十三駅」、三代豊国等の合作「御上洛東海道」などがある。

2 十返舎一九の『東海道中膝栗毛』が享和二（一八〇二）年に刊行され人気となり、以後二十年に渡って弥次喜多の続編が刊行された。またその後も『方言修行金草鞋』が文化十（一八一三）年から天保五（一八三四）年までの二十二年の間、刊行され続けたことが、人々の旅への興味を惹き起こしたと考える。文化七（一八一〇）年には八隅盧庵が『旅行用心集』を刊行、文政十三（一八三〇）年には江戸時代最大規模のお蔭参りが起きている。

3 大正十二（一九二三）年に市内初の鉄構橋に架け変わったため、木造最後の三滝橋。

4 『目で見る四日市の一〇〇年』七二頁。東光園版五十三次の写真は、カメラレンズの画角と人間の視野の差による構図の違いはあるものの、広重のアングルとそっくりな御油や、比較的似ている平塚などがあり、写された風景が広重の描いた場所だと思わせる説得力がある。

5 『東海道名所図会』には「三重川、同（四日市、筆者注）駅中にあり、一名御滝川といふ。或は三滝に書す」とあり、『伊勢参宮名所図会』には「三重川、四日市の町内石橋あり、（中略）俗に三たき川ともいふ」とある。

6 明和六（一七六九）年の「東海道四日市宿浜一色村末永村墨引絵図」（『ふるさとの絵図』一八頁所収）には、御滝川土橋の長さは五十二間とある。

7 明和六（一七六九）年の「東海道四日市宿浜一色村末永村墨引絵図」（『ふるさとの絵図』一八頁所収）には、東

海道の海蔵川にかかる橋、蒲の川にかかる橋、御滝川にかかる橋（全て土橋）の幅は、それぞれ二間半、二間、三間とある。

8 『四日市市史研究第九号』所収、引用部分は七四頁

9 『旧四日市を語る第八集』四日市市立図書館所蔵

10 『四日市市史研究第十五号』所収、引用部分は五六頁

11 『四日市湊絵図』井島文庫二二三六、四日市市立博物館所蔵

12 『四日市市史第六巻絵図編』解説一六四頁

13 国土地理院空中写真、四日市、一九七一年

14 『廻船方御由緒書』（伊島文庫四〇二、四日市市立博物館所蔵）『四日市市史第十巻史料編近世Ⅲ』四二〇頁所収

15 主なものは京師三条大橋、大津走井茶店、草津名物立場などで、『東海道名所図会』の挿絵が使われている。宮熱田神事は『尾張名所図会』の一の鳥居と端午馬の塔の挿絵が使われている。

16 『泗水のイメージ浮世絵に描かれた四日市』参照。

17 富田の焼蛤が描かれた「狂歌入東海道」は桑名宿の絵であるため、ここでは含まない。

18 註16に同じ

19 江戸時代は京都へ行くことを上り、江戸へ行くことを下り（東下り）と呼んだが、明治に入り、天皇が東京へ移ると、東京へ行くことが上りとなった。

20 京都と東京に、それぞれ御所と宮城（現皇居）を加えたため。

21 倉敷市立美術館ホームページ、コレクション「池田遙郵の世界」参照。

参考文献

『東海道分間延絵図』監修児玉幸多、東京美術、一九七七、八四

『目でみる郷土史 四日市のあゆみ』四日市市、一九七八

『目で見る四日市の一〇〇年』監修相山満、名古屋郷土出版社、一九九〇

『旧四日市を語る第八集』旧四日市を語る会、一九九七、私家版

『四日市市史研究第九号』四日市市、一九九六

『四日市市史研究第十五号』四日市市、二〇〇二

『四日市市史第六巻資料編絵図』四日市市、一九九二

『四日市市史第十巻資料編近世Ⅲ』四日市市、一九九六

『四日市市史第十七巻通志編近世』四日市市、一九九六

『ふるさとの絵図』失われた風景を求めて、四日市市立博物館、一九九七

『泗水のイメージ浮世絵に描かれた四日市』四日市市立博物館、二〇〇六

『謎解き浮世絵叢書 三代豊国・初代広重 双筆五十三次』二玄社、二〇一一

参考ホームページ

立命館大学アート・リサーチセンター ARC 浮世絵ポータルデータベース

東京富士美術館 収蔵品

倉敷市立美術館 池田遙郵の世界

公益財団法人知足美術館

国土交通省 国土地理院 地図・空中写真閲覧サービス 大英博物館 The British Museum Collection